



No.9 2021.11.22

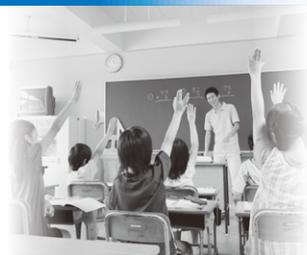
岩手県教職員組合  
岩手教育総合研究所〒020-0022  
岩手県盛岡市大通一丁目1-16  
岩手教育会館4F 岩手県教互センター内  
TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535  
E-mail:j.sato8252@gmail.com

リレー特集



## 岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～



## 子どもたちに体験学習の機会を

さいとう まな  
齊藤 愛

(岩手大学教育学部1年)

略歴

- 2011年 大槌小学校2年生 東日本大震災で被災
- 2018年 大槌町立大槌学園を卒業、盛岡第三高校に入学
- 2019年 第22代高校生平和大使として活動開始
- 2021年 岩手大学教育学部に入学

「あなたたちは私たちの話を直接聞ける最後の世代です。そしてあなたたちは被爆体験を聞いた者として、知った者としての責任があります。」

これは、私が高校2年生の時の夏、高校生平和大使の活動で長崎に行った時に被爆者の方から言われた言葉です。被爆から76年が経過し被爆者の高齢化・減少が進み、被爆体験や戦争体験などを直接聞ける機会はより貴重になってきています。その一方、学校の平和教育活動で、戦争当時の様子を映像で流したり戦争体験者の方から直接お話を聞いたりする取り組みが行なっている学校は減少しています。しかも、多くの方が、つい76年前の日本の状況をどこか今の現実とは違う、遠いものと感じてしまっているこの状況に、私は危機感を感じずにはられません。今回は、私が今まで様々な体験をしてきた中で感じたことを少しでもお伝えできたらと思います。

申し遅れましたが、私は岩手大学教育学部1年の齊藤愛と申します。私は将来、岩手県の学校の先生になり岩手の教育に携わっていきたいと思っており、今は大学で教育について学んでいます。私は高校生の時に、「第22代高校生平和大使」として活動してきました。高校生平和大使は、核兵器の廃絶と戦争のない平和な世界の実現に向け「微力だけど無力じゃない」をスローガンに掲げ活動しています。

高校生平和大使は毎年国連に派遣され、核兵器廃絶を世界に直接訴えています。この訪問活動は1998年に長崎の高校生から始まり、今では活動は全国に広がっています。岩手県から高校生平和大使が選出されるようになったのは東日本大震災後の2011年からで、岩手県から選ばれた高校生平和大使は、核兵器廃絶だけではなく、世界中の人たちに支援への感謝と支援の継続・連帯の大切さを訴えています。そして、私がこ

の活動に参加しようと思った本当のきっかけは、東日本大震災で被災した時にいただいた支援への感謝を直接世界に届けたいと思ったからです。私は小学校2年生の時に大槌町で東日本大震災を経験し、世界中の多くの方々からたくさんの支援をしていただきました。その時の感謝を直接伝えたい、そんな思いで高校生平和大使の活動に参加し始めました。

東日本大震災と原爆。一見何の接点もなさそうな2つの出来事ですが、大きな共通点があります。それは、「伝え続けなければこれらの悲劇を繰り返すことになる」ということです。これに気づいたきっかけは、中学校の修学旅行で行った東京大空襲戦災資料センターで、東京大空襲を経験された方のお話を聞いたことでした。これはある意味私の人生を変えた出来事でもあったかもしれません。

話が前後して申し訳ないのですが、私はもともと、自分の被災経験を人に話すことをためらっていません。「被災者」は自分だけではないし、まして世界では様々な災害や紛争が起こっており、こんな私を被災者というのも何だか気が引けていたのです。しかし、東京大空襲の辛い経験を、彼女の耐え難いほどの苦しみを思い出してまで語ってくださった空襲体験者の方を見て、このような悲惨な出来事を二度と繰り返してほしくないという彼女の願いを強く感じました。そして、私は「被災者」ではなく「伝承者」として自分の東日本大震災の被災経験を語っていきたいと思うようになりました。実はこれも私が教師を目指す理由の一つなのです。

過去を知り、過去から学ばなければ、同じことが繰り返されます。同じような悲劇を繰り返さないためにも、過去に目を向け、向き合うことがとても大切です。向き合い方が直接的であればあるほど、受け取り手の思想や行動に大きく影響を与えます。

昨今、被災経験のない子どもに津波の映像を見せたり、現代の子どもに空襲の映像を見せたり、といった直接的ないわゆる「平和教育」は減少傾向にあります。あまりにも非現実的な内

容にショックを受け、体調を崩したりしてしまう子がいるからです。学校はそういった子どもたちへの対応もしなくてはならず、平和学習の内容は慎重に検討されているのだと思います。しかし、本当にこのままでいいのでしょうか。

あくまでも私の考えですが、子どもたちには多少なりともショックを感じてもらうことが必要だと思うのです。社会が「平和ボケ」しているからこそ、これが現実に入った出来事なのだ、これが現実になりうる可能性を秘めている、ということを学習で子どもたちに感じてもらい、社会の当事者意識を育てていく必要があると思います。「平和ボケ」を放っておいた結果が、国防に関する憲法9条の改憲問題をはじめとする様々な社会問題に無関心な若者の増加につながっているのではないかと思うのです。

長々と語ってしまいましたが、つまり何が言いたいかというと、子どもの体験学習をもっと増やすべきだということです。ただ教室で座って先生が語りかける一方的な「講義」のような学びだけではなく、直接的に見たり、感じたりして、様々な感情を子どもたちに経験して欲しいと思っています。そうすることで、子どもたちの心の豊かさを育んだり、「生きる力」を身につけることにつながったりすると思います。

将来私が先生になったとき、自分の経験を子どもたちに伝え、また今まで学習してきたことを伝え続けることが出来るように、学び続ける姿勢を忘れずに持ち続けたいです。



写真提供:いわて教育文化研究所高校生平和大使派遣委員会・いわて

## 義務教育に農業を



なか ほら 中 洞 正  
(中洞牧場相談役)

### 略歴

- 1977年 東京農業大学卒
- 1984年 岩泉町に牧場開設
- 2005年 東京農業大学客員教授就任
- 2019年 帯広畜産大学非常勤講師就任  
内閣府地域活性化伝道師

私は岩泉町の最奥の地、標高 800m 付近で牧場を 40 年近く営んでいる。町の中心から車でノンストップで 30 分もかかる辺境の地である。真冬にはマイナス 20 度にもなる酷寒の地でもある。ここに全国から若者たちが集まってくる。現在はコロナの影響もあって 20 人弱のスタッフであるが最盛期には 25 人にも及ぶ若いスタッフが九州から関西、関東、北海道の各地から参集してきた。そのほかに研修として大学農学部の学生を中心に年間 200 名前後の研修生を受け入れてきた。

現在は農学部の学生でもそのほとんどが都会生まれの学生である。農学部の学生でありながら大学に入学するまで農業の経験もほとんどない学生が多い。

また、私は酪農の傍ら二つの大学の客員教授や非常勤講師を務めている。最近はコロナの影響



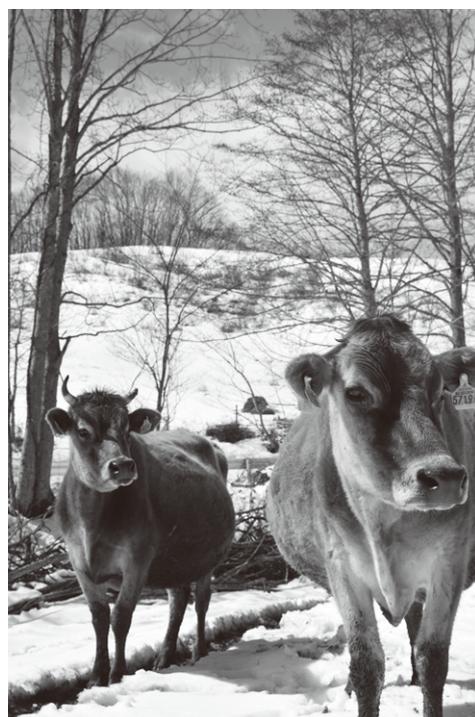
写真提供:中洞牧場

響でほとんど Zoom での講義が多くなったが講義の時は学生たちに問う。「今、生きるために最も必要なものは何だ」と。すると学生たちは必ずと言っていいほど「スマホとお金」という答えが返ってくる。これが戦後の日本の教育の縮図といって過言ではあるまい。

「おなかがすいたらどうする?」と再び問い直すと「お金さえあればコンビニでもスーパーでも食べ物は買って食べることができる」という言葉が安直に出てくる。

これは決して若者に限ったことではなかろう。国全体が食料や農業を蔑ろにしている現象である。その結果、食料自給率 37%という先進国では最低の水準になっているのである。

人間が生きていけるのは自然環境と食料があるからであり、今の教育では生きる上でもっと



写真提供:中洞牧場



写真提供:中洞牧場

も単純なことを理解できていない。特に都市の若者は、農作物がどのように育っているか、それを育てる農家がどのような作業をしているか知らない者がほとんどである。

また、私どもの牧場には毎年地元の中学生在が体験学習に訪れる。生徒は当然ながら、引率してくる先生方も酪農、牛乳の実態を全くと言っていいくらい知らない。ましてここ、岩泉町はかつては酪農の先進地とまで言われた地域である。今はかなり廃れては来ているものの毎日給食で牛乳を飲んでいながらも関わらず、牛に触ったこともなく牛乳がどういう処理をされて食卓に上っているのかさえ知らないでいる。

新学習指導要領によって、小学校からの英語教育が昨年からはまったという。グローバル社会に向け、英語が話せないと国際競争で負けてしまうという理由からである。

数学者で作家でもある藤原正彦氏は「英語教育が国を滅ぼす」というタイトルで次のように述べている。「世界で一番英語がうまいのはイギリス人だ。なのに、イギリスはほぼ20世紀を通じて経済的には斜陽だった。英語が一番下手な日本はその間、最も大きい経済成長をとげた」と。さらに藤原氏は「1に国語、2に国語3、4がなくて5に算数、それ以外の教科は十以下」と述べている。続けて「全体の半分は国語と道徳、残りの時間の半分を算数に充て、あとは音楽や図工、体育など楽しい授業で埋めればそれで十

分だ」とも言っている。

教育は人間を育てるのが原点である。それには国語力が最も重要であるという藤原氏の意見には賛同できる。私はそこに環境と食料、農業という授業を加えたい。なのに、新学習指導要領では産業競争力の強化が教育の目標となっている。これは本末転倒と言わざるを得ない。

これほどまでに地球環境が破壊されているのは、産業革命や大航海時代から始まるグローバル化による強欲資本主義がその根底としてある。その事実を義務教育の過程でしっかりと認識させ、国民の命を守るためには環境、食料、農業の重要性を認識させる教育が必要であろう。

生きとし生けるすべての生き物は、水と空気（自然環境）と食料があって命を継承できるのである。今、この基本的要素が蔑ろにされている。地球温暖化による環境破壊、世界では8億人にも及ぶ人々が飢餓に瀕している状況でこの事は明白である。

環境を守り食料を確保することが、この地球上に生かされているすべての生き物の必須条件なのである。万物の霊長とまで言われる人間という生き物がこの事実を無視し「今だけ、金だけ、自分だけ」という生き方をしていることを猛省しなければなるまい。

そのためにも、義務教育から自然環境を学び、農業を体験し、食について学ぶという教育の形を早急に構築することが急務である。



写真提供:中洞牧場



# 教室の窓から



## ビリからの脱出

2～3年生と持ち上がった生徒たちを卒業させ、S中での3年目は1年生の担当だと思っていたところ、管理職からの打診は2年連続の3年生担任だった。あるクラスで、担任と生徒の関係がうまくいかなくなってのご指名だった。

そのクラスには、2年生の時点で学校になかなか登校できない生徒が4人いた。1人は家に閉じこもっていることが多い生徒、1人は友人との交友はある生徒、1人は登校してもクラスとは別な部屋で過ごす生徒、1人はリーダーだったが挫折して部活のサッカーだけしに来る生徒といった具合だった。

4月の後半に、5月に行われる体育祭の選手を学級で話し合う時間があった。当時のS中の体育祭は、県営運動公園の陸上競技場を借りて行われ、市中陸上選手選考の参考にもされるため、ほとんどが陸上競技種目という行事だった。

まだ、生徒たちの理解も十分でなかった私は、「自分たちで話し合っているいいですか?」という生徒たちに、1つだけ条件をつけることにした。それは、「選手の決定はクラスの全員が納得して行うこと。」というものだった。

ついでに、「去年は学年7クラス中何番目だったの?」と聞くと、口をそろえて「ビリだったよ〜!」との答え。「じゃあ、気楽にいこうよ。1つでも順位を上げることができればいいじゃん。」と慰めにもならない激励をした。

黙って見ていると、男女別々に話し合いの輪ができていく。男子は立候補制で、運動の得意な生徒、意見の強い生徒から種目が決まっているようだ。女子は、学校に登校できない生徒の種目をどうするかで困っているようだった。

時間の半分ぐらいが経過したところで、Tという生徒が私のところに相談に来た。

「先生、みんなが3000m走に出てくれって言うんだけど、オレ、完走できる自信がないから迷っています。途中で棄権してもいいですか?」

「棄権って、例えば10回走ったとしたら何回ぐらい棄権する可能性があると思う?」

「う〜ん、・・・5回ぐらいかな。」

「じゃあ5回は完走できる可能性があるってことだね。ところで、棄権していいかわからないから、職員室に行って体育のS先生に聞いておいで。その間、保留にしておくから。」

「じゃあ、S先生に聞きに行きます!」と言ってTは教室を出て行き、しばらくして戻って来た。

「先生、S先生がどうしても無理なら棄権してもいいって言っていました。」

私は一旦男女別の話し合いをストップして、クラス全体で確認の場を持つことにした。

「男子の3000m走だけど、Tから棄権が心配だという申し出があって、確かめたら棄権することはできるそうだ。でもその場合、完走でもらえる1点は入らない。誰か、確実に完走できる人を選ぶという選択も考えられるけど。」

「・・・」

3000m走は男子の種目の中でも一番キツイ種目なので、みんな黙っている。

「じゃあ、もし棄権することになっても責めないってことで、Tにみんなからお願いしていいのかな? T、やってくれるかな?」

「お願いしたいです。」との声が何人かあり、

「それなら、オレ、やってみます。」とTは受けてくれた。

もう一つ、女子の種目ではハードル走の選手がなかなか決められないでいた。

「先生、Mさんをお願いしてもいいですか?」

Mは、ほとんど登校していない生徒で、運動も得意ではない。私は、考えを話すことにした。

「みんなは、4人に、体育祭に参加しようよ!とか応援だけは一緒にやろうよ!とか、誘う気持ちはないのかな?仮に99%参加が難しいとしても、Mが残り1%で来た場合、ハードルの選手だと知ったら、もう卒業まで来なくなるんじゃないか。Mを誘うなら、彼女が練習なしでできる幅跳び以外は難しいんじゃないか?幅跳びなら10cmでも参加記録になるんだよ。」

「……」

少しの沈黙があって、A が手を挙げた。

「私、ハードルやってみます。一応、陸上部だし。Mさんも誘いたいし。」

彼女は、陸上部ではあったが砲丸投げの選手で、しかも、その後その年の夏に全国大会に出場して優勝することになったほどの選手 (!) だった。私は、彼女の申し出を有難いとは思ったが、クラスの生徒たちがそのことをどう思うか、聞いてみたいと思った。

「A が砲丸投げに出るなら、1 位になる可能性は高いと思うし、お姉さんの出した校内記録の更新もあるかもしれない。でも、みんなが本気でハードルをやってほしいと思うなら、申し出を受け入れてもいいと思うんだ。どうかな?」

「……」

沈黙の後、副委員長の I が手を挙げた。

「先生、女子のみんなでもう一度話し合ってみたいので、少し時間をもらえますか?」

「いいよ。みんなで納得のいく方法があるかどうか、話し合ってみるといいね。」

少しして、女子の競技リーダーから報告があった。

「話し合いの結果、A さんには初めの案の通り砲丸投げに出てもらい、体育の先生にお願いして、全員でもう一度ハードルの記録を取って一番早いタイムの人に決めたいと思います。」

それを受けて、議長がみんなに聞いた。

「今の報告・提案についてどうですか?」

男子からも賛成する意見があり、そのように決定することになった。私は、最後にもう一度念押しすることにした。

「あとは、この場にいない 4 人にも確認して OK が取れたら正式決定にしよう。決まったら、クラスのみみんなで決めた選手だから、クラスのみみんなで応援できるようにしていこう。」

体育祭当日は、私のささやかな期待以上に、クラスの全員が一生懸命に応援する姿が見られた。自分たちでアイデアを出し合って工夫した応援も楽しそうだ。そして、学校に来ることが難しい状況にある生徒たちへの配慮も、その後の学習や

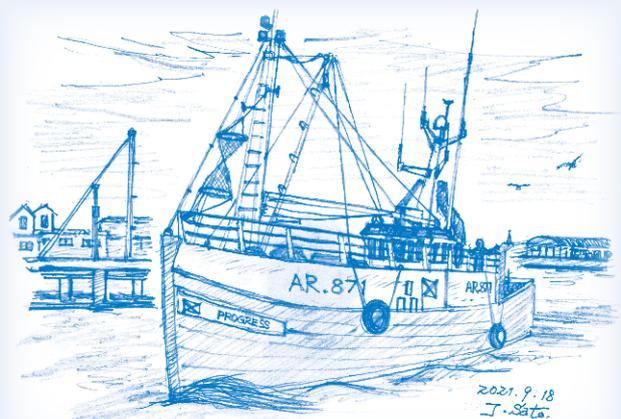
行事の際に生かされることになった。4 人は競技に参加できたのかというところではできなかったが、競技場のスタンドの隅の方に、その姿を見ることができたのだ。

さて、競技の結果はどうだったのか。私は昨年の最下位並みの結果を覚悟しながら、「順位はさほど重要ではない。みんなで団結したことや一生懸命取り組んだ価値こそ大切だ。」という慰めの言葉を用意していたし、実際にそう思ってもいたが、結果は実に意外なものとなった。

当日最後の種目は、男子 4×100mリレーだったが、リレーは男女とも学年上位は無理だろうと思っていた。しかし、何という天気の悪戯か突然の雷雨の襲来となり、リレーが中止になった。その結果、何と 1 点差で学年団体総合優勝となってしまったのだ。

実は、あの棄権を心配した 3000m走の T は、午前中の競技で完走して 1 点の参加点を獲得していた。その 1 点のお陰で、優勝することができたのだ。

私は、行事のたびに、反省の資料として「活躍したと思う生徒を 3 人、理由を挙げて書いてほしい。」というアンケートを生徒たちをお願いしていたが、男子 100m走で 1 位になった K や、女子砲丸投げで 1 位になった A と並んで、男子 3000m走で最下位ながら完走した T の頑張りを挙げる声が多かった。生徒たちの見方、考え方は、運動能力を生かして競技の 1 位を取ることと、苦手でも自分の限界に挑戦して完走することを同列に捉えるように育っていたのだ。(J)



IWATE 教育総研ニュースはホームページにも掲載しております。

<http://www.iwakyoso.gr.jp/soken/index.html>



QRコードは  
こちらから!

